

自分で決める学習活動

— 全学年 音楽科「楽器あそびⅠ、Ⅱ」の実践を通して —

木村敦子

1 音楽科における自己決定

音楽活動における児童の自己決定は、次のように考えられる。

- ①どのような手段で表現するか
- ②どのように表現するか

本研究では、児童が表現方法を選択し、自分のイメージをもって表現に取り組むことができるように、児童の選択についての実態と集団への関わりから捉え、具体的な支援を考えていくものである。

選択についての実態

偶然手にした楽器を選んでいる。

友だちや指導者の模倣によって楽器を選んでいる。

好きな感触や音色が明らかになって選んでいる

友だちや指導者の活動への関心から、友だちや指導者が選んだ楽器を選んでいる

友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。

過去の経験からどのような奏法をしたら自分のイメージが表現できるかといった観点で選んでいる。

友だちと一緒にするために友だちの好みを考慮して自分の楽器を選んだり、友だちの表現と合うような奏法で演奏する。

支援

・児童が好んでいる感触や音色の楽器を選択肢にする。

・選択肢のイメージをもつことができるようにいろいろな楽器の音を出してみる場を設定する。

・模倣できる場（友だちや指導者が演奏するのを見る場）を設定する。

・児童が特に好んでいる楽器を選択肢にしたり好んでいる活動の選択場面を設定する。

・これまでに楽器を使ってどのような音をだしたのか、実際にいろいろな奏法を提示する。

・友だちと一緒に演奏するために、自分の音をコントロールしたり、順番に聞き合うことができる場を設定する。

集団への関わり

指導者と一緒に活動をする。

指導者のことばかけで活動をする。

友だちの動きを手がかりに活動する。

集団での活動の仕方がわかって友だちと関わりながら活動する。

2 実践事例－「楽器あそびⅠ・Ⅱ」

児童の意欲は、自分の思いを自分なりに表現する活動、表現したことの達成感をもつことができる活動を通して育まれていくものであると思われる。楽器を演奏することは児童が好んで取り組む活動である。児童が音楽を感じたり、自分の出した音を意識して意欲的に音楽表現をしていくためには、一人ひとりの選択（自己決定）の場が活動の中にあることが必要である。そこで、音楽活動に求められる条件としては、一人ひとりの興味・関心に応じることができるものであること（自分の好きな楽器が選択できるようになっていること）、児童の表現に合わせて音楽を変化させていくことが可能なものであること（児童が自分の音楽を決めていくことができるもの）、児童相互に表現し合う場、集団で関わりながら表現できる場が設定されていることなどが考えられる。

これらのことから、本題材では、楽器あそびⅠとして教材曲「みんないっしょに」（C. ロビンス、P. ノードフ作）、楽器あそびⅡとして教材曲「Fun for Four Drums」（C. ロビンス、P. ノードフ作）を主教材として選択し、さまざまな音色の楽器を演奏する活動を行っていくものである。教材曲「みんないっしょに」は、たいこ、シンバル、リードホーン、トーンチャイム、タンブリンが歌の中に順番に出てくる曲である。歌で楽器を演奏する順番がわかることから、分担奏や合奏の構成が児童にわかりやすくなっている。また、児童が自分の好きな感触や音を選択できたり、一人ひとりの演奏する速さやタイミングに合わせて音楽が展開できるようになっている。また、教材「Fun for Four Drums」は4種類の類似した音色、類似した奏法の楽器をリズムに合わせて演奏していくものである。音色の違いや、友だちの音を聞き合ったりすることが、音楽ゲームになっている活動である。

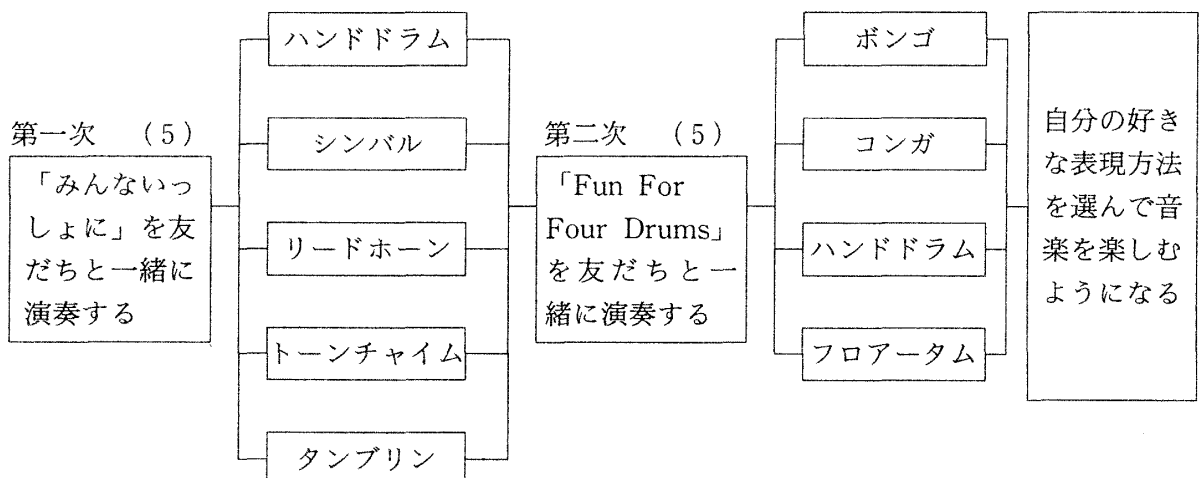
本学級では、1年生から6年生までの14名を学習集団として、音楽の授業を行っている。音楽活動への児童の関心は高く、特に楽器を使用した活動を好んでいる。全学年合同の学習は、音楽以外でも行われているため、児童相互が関心をもって活動している。

指導にあたっては、児童の自己選択の実態に応じて、複数の中から選ぶ～2者の中から選ぶといったように提示をしていく。さらに選択した楽器で、一人ひとりが自分なりの表現をしていけるよう、伴奏の工夫、教材提示の工夫をしていく。また、児童相互が聞き合ったり、模倣し合ったりできる場も設定していくものである。

(2) 指導目標

- ① 自分の好きな楽器を選ぶことができるようにする。
- ② 音楽の流れにのって楽器で表現できるようにする。
- ③ 友だちと一緒に表現できるようにする。

(3) 指導内容と計画（10時間）



(4) 指導事例 (第二次 第5時)

本時の目標

自分の好きな楽器を選び、友だちと一緒に楽器を演奏することができる。

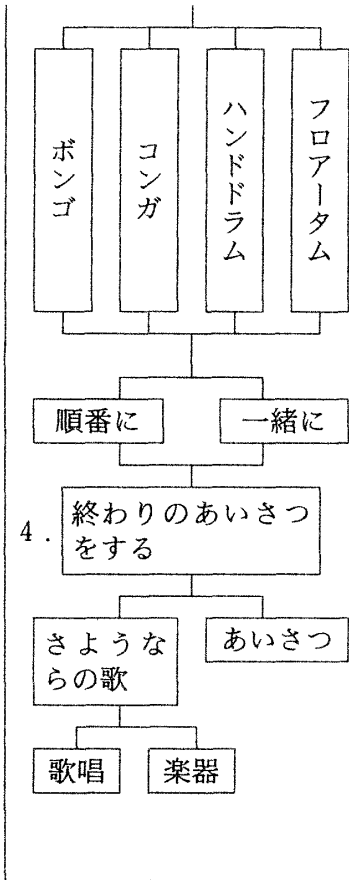
目標行動

児童	目標行動
③	自分の前に提示された2～3の楽器の中から自分の好きな楽器を選んで演奏する。 音楽の流れにのって持続して演奏できる。
②⑦⑩	自分の前に提示された楽器の中から1つを選んで演奏する。 音楽の拍の流れにのったリズムがうてる。 指導者のことばかけで分担奏ができる。
①⑨⑩	複数の楽器の中から自分の好きな楽器のところに行く。 音楽の拍の流れにのって友だちと一緒に分担奏ができる。
④⑤	複数の楽器の中から自分の好きな楽器を示す。 友だちの音を聴きながら、順番が分かって分担奏ができる。
⑥⑧	複数の楽器の中から自分の好きな楽器を示す。 分担奏の順番が分かり、自分で工夫して表現できる。
⑫⑬⑭	複数の楽器の中から自分の好きな楽器を示す。 友だちと一緒に工夫しながら合奏できる。

仮設	異なった音色の楽器での分担奏を取り入れた活動を設定するならば、自分の好きな楽器を選び、表現するであろう。
----	--

準備 ボンゴ、コンガ、ハンドドラム、フロアタム、トーンチャイム、リゾネーターベル
学習の展開

学習過程	予想される活動	指導・支援活動	
		全体	個別
<p>1. 始まりのあいさつをする</p> <pre> graph TD A[始まりのあいさつをする] --> B[あいさつ] A --> C[おはよ うの歌] B --- C </pre> <p>2. 既習曲を歌う</p> <pre> graph TD D[既習曲を歌う] --> E[今月の歌] D --> F[リクエスト曲] E --- F </pre> <p>3. 「Fun For Four Drums」を演奏する</p>	<p>○児⑦⑩は、指導者の側に来るであろう</p> <p>○児④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑫は、歌いたい歌をリクエストしてくるであろう。</p> <p>○前に出て楽器を自分で選ぶことに援助</p>	<p>1. ・学習の始まりとして毎時間位置づける。 ◎一人ひとりの児童が自分の好きな表現であいさつができるように伴奏を合わせる。</p> <p>2. ・児童のリクエストは、できるだけとりあげて歌うようにする。</p> <p>3. ◎児童一人ひとりが好きな楽器を選べる</p>	<p>1. ・本日の当番、児が前へ出て号令をかけるように言葉かけをする。</p> <p>2. ・児①②③が活動に入りやすいよう、指導者が側にいて言葉かけをしたり、一緒に動く。</p>



が必要であると思われる児童 (③)

○指揮をしたいと言うであろう (⑤⑧⑫)

○友だちの楽器の順番を示すであろう。(⑥⑧⑫)

○順番に演奏する際に援助が必要であると思われる児童 (③⑦⑪)

○友だちの音を聞いて演奏するであろう (④⑥⑧⑫⑬⑭)

よう、複数の楽器を提示する。

○音楽の速さや拍の流れは、児童の活動の速さによって決定する。

・曲に出てくる順に楽器を配置する。

4. ○始まりと同様に毎時間位置づける。

○「さようならの歌」は、2曲歌うようにする。2曲ともリゾネーターベル、トーンチャイムを使用する。歌で学年を呼ぶようにする。

3. ○児①②⑦⑪が自分の好きな楽器を選ぶことができるよう、4つの楽器を選択肢として提示する。児③は2つの楽器を選択肢として提示する。

・児⑤⑧⑫が指揮ができやすいよう、指揮棒を準備する。

⑤には演奏順をことばかけをする。

(5) 児童の活動と支援 (児③, 児⑦の事例) 児③ ----- 児⑦ —— で示す。

第一次第5時			第二次第5時		
選択についての実態	支援	集団への関わり	選択についての実態	支援	集団への関わり
偶然手にした楽器を選んでいる。	・児童が好んでいる感触や音色の楽器を選択肢にする。	指導者と一緒に活動をする。	偶然手にした楽器を選んでいる。	・児童が好んでいる感触や音色の楽器を選択肢にする。	指導者と一緒に活動をする。
友だちや指導者の模倣によって楽器を選んでいる。	・選択肢のイメージをもつことができるようにいろいろ楽器の音を出してみる場を設定する。	指導者のことばかけで活動をする。	友だちや指導者の模倣によって楽器を選んでいる。	・選択肢のイメージをもつことができるようにいろいろ楽器の音を出してみる場を設定する。	指導者のことばかけで活動をする。
好きな感触や音色が明らかになって選んでいる。	・模倣できる場(友だちや指導者が演奏するのを見る場)を設定する。	友だちの動きを手がかりに活動する。	好きな感触や音色が明らかになって選んでいる。	・模倣できる場(友だちや指導者が演奏するのを見る場)を設定する。	友だちの動きを手がかりに活動する。
友だちや指導者の活動への関心から、友だちや指導者が選んだ楽器を選んでいる。	・児童が特に好んでいる楽器を選択肢にしたり好んでいる活動の選択場面を設定する。	集団での活動の仕方がわかって友だちと関わりながら活動する。	友だちや指導者の活動への関心から、友だちや指導者が選んだ楽器を選んでいる。	・児童が特に好んでいる楽器を選択肢にしたり好んでいる活動の選択場面を設定する。	友だちの動きを手がかりに活動する。
友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。	・これまでに楽器を使ってどのような音を出したのか、実際にいろいろな奏法を提示する。		友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。	・これまでに楽器を使ってどのような音を出したのか、実際にいろいろな奏法を提示する。	
過去の経験からどのような奏法をしたら自分のイメージが表現できるかといった観点で選んでいる。	・友だちと一緒に演奏するために、自分の音をコントロールしたり、順番に聞き合うことができる場を設定する。		過去の経験からどのような奏法をしたら自分のイメージが表現できるかといった観点で選んでいる。	・友だちと一緒に演奏するために、自分の音をコントロールしたり、順番に聞き合うことができる場を設定する。	
友だちと一緒にするために友だちの好みを考慮して自分の楽器を選んだり、友だちの表現と合うような奏法で演奏する。			友だちと一緒にするために友だちの好みを考慮して自分の楽器を選んだり、友だちの表現と合うような奏法で演奏する。		

3 考察

(1) 児童の自己決定について

本題材で、児童が自分どのような手段で表現したいかという選択を行うには、次のような過程があると考えられる。

ア日常的に好んでいる物を指導者が提示し、音を出してみて選ぶ。

イ日常的に好んでいる物を指導者が提示し、友だちが演奏するのを見て、自分はどれにするか選ぶ。

ウ前回選んだものを選ぶ。

エ提示された複数の楽器を、全部音を出してみて好きな音のものを選ぶ。

オ友だちが演奏するのを見て、提示された複数の楽器の中から好きな音のものを選ぶ。

カこれまでの経験から、好きな音の楽器を選ぶ。

第一次の活動において、児③は、シンバル、トーンチャイム、リードホーンを5つの楽器の中から選んで演奏した。これらの楽器を選択し、曲全体の流れを把握して演奏することができた。第二次の活動においては、4つのDrumを順次選んで演奏したが、積極的に選択することがなかった。また、曲の始めだけ音を出して演奏をやめることも多く見られた。これらの活動から、児③は好きな音色の楽器が明らかになってきていると思われる。第一次では、使用した楽器が多様な音色や多様な奏法のできるものを選択肢として提示している。一方、第二次では音色の違い、奏法の違いも差の少ないものであった。児童が自己決定するためには、児童の好むものが選択肢の中に含まれていること、選択肢の1つ1つが十分にイメージできていることが必要である。第二次の活動の設定がが好みに適応できるものでなかったのか、楽器や曲のイメージができるまで活動できていなかったのか明確にしていくために、編成を変えて実施することが考えられる。

(2) 集団への関わりと自己決定について

本題材では、4～5人の集団で音楽を表現する活動を行った。児童が楽器を選ぶということについて、集団への関わりの視点から次のようなことが見られた。

ア自分と複数の楽器といった関係から選んでいる。

イ友だちの表現を聞いてイメージをもち選んでいる。

ウ集団での活動が成り立つかどうかで選んでいる。

児⑦の活動を見ると、第一次では、アの選択を行っていた。そこで、活動を通して集団への関わりを図っていくことをねらい、一緒に表現する友だちに意識が向くことばかけを行うようにした。第一次の第3時から、他の児童の表現を模倣したり、他の児童の表現を聞いて順番に分担奏をするようになってきた。また、児⑥⑧⑩⑭は、曲全体の流れが把握できるようになってくると、ウの選択を行うようになってきた。

これらの児童のようすから、集団への関わりと楽器や表現の仕方を選ぶといったこととの関連から支援を考えていくことによって、相互に質的な高まりがあったと考えられる。

(3) 今後の課題

本研究では、児童の選択の実態に対しての支援を集団への関わりとの関連から考えていった。事例において、選択の実態の質的な高まりと集団への質的な高まりの相互作用が見られた。このことから、仮説として設定した支援のあり方について相互の質的な高まりを図るものと考えていく必要があると思われる。

(参考文献)

P. Nordoff, C. Robbins“” Fun For Four Drums”, Theodore Presser Com., 1968

P. Nordoff, C. Robbins, “Children’s Play Songs Vol.5”, Theodore Presser Com., 1980